

【報告】

本学部における「公開授業」の取り組み

鮫島 道和 長谷川勝俊 宮谷 恵
安田 真美 渡邊 順子 野村志保子¹⁾

聖隷クリストファー大学看護学部

The trials on workshop-class in Department of Nursing, Seirei Christopher College

Michikazu SAMEJIMA Katsutoshi HASEGAWA Megumi MIYATANI
Mami YASUDA Yoriko WATANABE Shihoko NOMURA¹⁾

Department of Nursing, Seirei Christopher College

抄録

本学部のFD・授業評価委員会では「公開授業」の必要性を2003年度から検討し、2003年度は「看護学概論Ⅲ」を、2004年度は「身体の構造と機能Ⅳ」を公開授業として実施した。同時に参加した教員にアンケートを行って、公開授業の有用性、問題点などを検討した。その結果、公開授業にはまだいくつかの課題は残るものの、教授法改善、授業改善に関して、「学生による授業評価」では不足する観点を与えるものであること。また、「教員による授業相互評価」の一つの方法としては、特定の少数の教員だけによる評価方法より、「公開授業」のような不特定・多数の同僚教員から評価が得られる方法の方が、教授法の改善という観点から、効果やメリットが大きい可能性があることが分かった。

キーワード：公開授業、授業評価、授業改善、教授法、ファカルティー・ディベロップメント (FD)

1) 現在の所属 久留米大学医学部看護学科

I. はじめに

聖隷クリストファー大学看護学部では、1999年度から2004年度まで、6年間にわたって「学生による授業評価」を実施し、学生が授業についてどの様に評価しているかを通して、教授法を改善していく取り組みを行って来ている。教授法を改善するためには、「学生による授業評価」を実施し、そこから改善点を見つけていくことも一つの方法であるが、他にも、教育研修への参加、同僚の授業参観、自分の授業を録音・録画して分析する、教員による授業の相互評価等、様々な方法がある¹⁾。近年、「学生による授業評価」とあわせて、あるいはそれに代わる方法として、「教員による授業相互評価」を取り入れる大学が出てきており、例えば、三重県立看護大学²⁾や島根大学医学部（医学科と看護学科）³⁾などが実施している。これらは、数人の同僚が、指定された授業を参観して、その授業の評価を行い、それを本人にフィードバックするものである。

本学では、教授法の改善の取り組みとして、教員研修会の開催と「学生による授業評価」を実施しているが、「学生による授業評価」は、あくまでも学生の視点による評価であるという限界がある。実りある授業改善を図るためには、学生による評価以外の方法での評価も必要になってくる。例えば「教員による授業相互評価」を実施するには、教員が自身の授業を公開し、同僚からの評価を率直に受け入れていく姿勢が求められるが、これまでの伝統的な大学における講義に対する考え方として、授業はその教員自身の独自の営みであって、公開にはなじまないという考え方もある。

一方、大学教育の裾野の広がりとともに、大学教育の質を保証するための有効手段を大学自

身が確立することは、重要な事である⁴⁾。大学設置基準の緩和に伴い、大学教育の質の確保は、大学自身の責任において行うことが要請されている。従って、看護系大学や学部・学科も100を超えるようになった現在、本学部の教育の質を私たち自身の手で保証する手段の確立を避けて通ることは出来ない。

そう考える時、学生による評価に加えて、別の観点からの授業評価を行い、教授法を改善していく努力が求められる。FD・授業評価委員会では、そうした観点から、2003年度から、ひとまず少数の教員による評価ではなく、多くの教員が参加することのできる「公開授業」を行うことで、同僚教員による授業の参観を通じた授業評価への道作りをする試みを始めることにした。以下に2003年度と2004年度のその試みの結果とまとめを報告する。

II. 公開授業の実施経過

1. 2003年度

2003年度の公開授業を実施するに当たって、どの科目を対象にするか、FD・授業評価委員会で検討を重ねた結果、「学生による授業評価」を実施しているのだから、学生から最も高く評価された授業を公開授業として取り上げ、なぜこの授業が「学生による授業評価」で最も高く評価されたのかを教員に考えてもらうことが良いのではないかという結論に至った。そこで、2002年度の「学生による授業評価」で、評価項目の平均値の総合が最も高かった、「看護学概論Ⅲ」（野村志保子教授：基礎看護学）を対象に公開授業を行うこととし、担当教員と相談した。その結果、

(1) 11月4日（火）4・5時限

(2) 11月18日（火）4・5時限

の2回の授業を公開授業とし、教員はこのどちらに（あるいは両方に）、いつ参加しても良いこととした。「看護学概論Ⅲ」（対象4年次生）の授業目的は、

◇目的

卒業前に、これまでの学修で身につけた人間・社会・健康などに関する理解、諸領域の看護学に関する知識や臨地実習での学びを統合しながら、幅広い視野に立って看護を再考し、これからの社会において看護職に求められる機能・役割、看護倫理などについて考察する。

であり、その目標は、

◇目標

1. 変化する社会で、「看護職に求められるものは何か」を幅広い視野から考え、表現できる。
2. 保健医療福祉の分野における他職種の人々との連携・協働において、看護職の専門性・独自性を考え、説明できる。
3. 看護実践場面において看護職者に求められる看護の倫理性について、将来の医療・看護を見据えながら、幅広い視野にたって考え、説明できる。
4. 現代の医療・看護の現場において、社会的にも重要な課題になっているリスクマネジメント、診療記録の公開に関わる課題について、看護職の責務を考え、説明できる。
5. 自立・自律した看護職者になるということは、どのようなことが説明できる。

であった。授業は、主としてグループワークで進められ、公開授業の対象となった時期には、グループワークの発表会が行われた。

2. 2004年度

2004年度の公開授業の実施にあたって、FD・授業評価委員会で検討した方針は、今年度は、学生から高い評価を得た授業ではなく、教員の自主的参加を求めるために、公募により公開授業を実施してくれる教員を募り、もし応募が無ければ、FD・授業評価委員会委員長が公開授業を行うというものであった。9月の教授会で公募を求める案内をしたものの、締め切りまでに応募者はなく、FD・授業評価委員会委員長が担当する、「身体の構造と機能Ⅳ」（鮫島道和教授：生理学）で公開授業を行うことにした。この科目は、いわゆる「生理学」の授業で、秋セメスターには、神経系の機能の授業と神経・筋の実習が実施される。担当教員は、この中で、神経・筋の実習を教員に見てもらいたいと提案し、

- (1) 11月26日（金）3・4・5 時限
- (2) 12月10日（金）3・4・5 時限
- (3) 12月17日（金）3・4・5 時限

の3回を公開授業とし、教員はどれに、いつ参加しても良いこととした。授業は、1年次生を対象に、同じ内容の実習が3回行われた。「神経・筋の実習」の授業目的は、

◇目的

カエルを用いて、神経・筋標本を作成すること。および、電気ピンセットによる筋収縮の観察、活動電位の導出、伝導速度の測定その他を行うこと。

であった。実習では、自身の手で動物実験を行うことを希望しない学生のために、視覚を中心にした感覚実験のプログラムも用意され、9名の学生はこのプログラムで実習を実施した。公開授業を担当した教員が、実習を公開したのは、こうした実習内容が看護学部の生理学実習とし

て適切な内容を持っているかどうか、同僚教員の評価を仰ぎたいという意図があった。

いずれの公開授業の場合も、対象学生には、事前にこの時間が教員対象の公開授業になること、公開授業の目的は、学生の授業態度を評価するのではなく、この授業を進めている教員の教授法が評価されるのだということを説明し、学生の了解を得て実施された。

公開授業は、看護学部の教員研修会の一つとして行われたが、全学に公開され、他学部の教員も、また事務系職員であっても参加可能とした。2003年度の公開授業への参加教員はのべ30名（看護学部のべ28名＋看護短期大学部1名＋社会福祉学部1名）、2004年度の公開授業への参加教員は18名（看護学部16名＋看護短期大学部2名）であった。

Ⅲ. 公開授業の結果・考察

今回は、公開授業に参加した教員が公開授業をどの様に捉えたかを、参加者からのアンケート結果に基づいて考察した。

1. 公開授業のアンケート方法

公開授業では、参加教員にアンケートを行った。2003年度は、公開授業に参加する教員に、

- 「看護学概論Ⅲ」を学生が最も良い授業と評価した理由は何だと考えますか。
- こうした授業公開についてどう考えますか。

の2点についてアンケートに答えてもらうように事前に案内を行い、公開授業参加後に、その回答を回収した。回収数は13であった。

2004年度は、本学部の「学生による授業評価」

とほぼ同じ形式のアンケート用紙（表1）を用意し、それに記入を求めた。担当教員の提案で、授業評価用アンケート用紙に、⑧の項目を加えた。回収数は16であった。

2. 公開授業のアンケート結果

i) 2003年度

教員からのアンケート結果を表2にまとめた。「看護学概論Ⅲ」を学生が最も良い授業と評価した理由は何だと考えますか、という質問については、多くの教員が、授業のテーマが適切だったこと、授業の時期が適切だったことを指摘した。ついで、学生の主体性が発揮されていたからと、グループワークだったからという指摘が多かった。これは授業を構築していく上で重要な示唆を与えていると考える。適切な時期に、適切なテーマで、学生を主体として、小グループで授業を構成することが、学生から良い評価を得、学生も満足する授業になるということだと思う。これは、すでに多くの機会に、良い授業を組み立てる原則として指摘されていることでもある^{1), 5)}。

また、公開授業自体についての意見を表3にまとめた。役に立ったので今後も継続してほしいとの意見が半数あった反面、公開授業のありかたに改善の余地がある、あるいは自分の担当する授業には役に立つ内容は無かったとの意見もあった。公開授業を行う教員の負担の大きさを指摘した意見もあった。

ii) 2004年度

表4に、表1の11項目について、公開授業に参加した教員がどの様に答えたかをまとめた。教員の意欲は評価されたものの、教員は学生の理解度を確かめながら授業を進めていないことが指摘されている。また、看護学部でこうした動物実験を含む実習を行うことは、80%が有効

と評価したが、この公開授業の内容そのものが参加教員自身にとって役立つ点は必ずしも高く評価されなかった。

表1の自由記述欄に記載されたコメントを表5にまとめた。様々な意見があった中で、こう

した授業参観には意味があるというコメントが半数を超えた。また、授業の道具についての改善案、グループ編成・担当教員の不足、授業の運営についてなど、担当教員が授業を改善する上で役立つ意見が寄せられた。

表1 2004年度の公開授業に用いた教員用授業評価用紙

11/4/2004 FD委員会資料

2004公開授業の評価用紙（教員用）

- ◆公開授業日時： 月 日 () 限 : ~ :
 ◆授業科目： 身体の構造と機能、(実習) ◆学部・学年： 看護学部・1年
 ◆担当教員名： 鮫島道和

この評価用紙は、公開授業に参加した学生および教員の皆さんの反応を確かめ、教授法を改善し、授業をより充実したものにするための大切な資料となります。学生の成績および教員の個別評価とは、一切関係しませんので、率直にお答えください。

下記の1.~3.の項目については、a・b・c・dの該当する記号に○印をつけ、4.は自由に書いてください。

a 非常にそう思う b ややそう思う c あまりそう思わない d 全くそう思わない

1. 教員の取り組みについて

- ①この授業に対する教員の意欲・積極性が感じられた a・b・c・d
 ②学生の質問や相談に応じる姿勢があった a・b・c・d
 ③教員は学生の理解度を確認しながら授業を進めていた a・b・c・d

2. 授業内容と進め方について

- ④授業内容のレベルは適切でわかりやすかった a・b・c・d
 ⑤シラバス（授業概要・授業計画）と授業内容は対応していた a・b・c・d
 ⑥印刷物・視聴覚教材は有効に活用されていた a・b・c・d
 ⑦この授業は得るところ、学ぶところがあり自分のためになった a・b・c・d
 ⑧看護学部で、動物を使ったこの様な実習を行うことに意味があると思いますか a・b・c・d

3. この授業に対するあなた自身の取り組みについて

- ⑨授業には興味・関心をもって臨んだ a・b・c・d
 ⑩授業に出席するにあたって準備（予習）をした a・b・c・d
 ⑪授業の内容（または課題）を理解（または達成）できた a・b・c・d

4. この授業で良かったこと、あるいは改善を希望すること、あなたの感想や意見、等を自由にお書きください（aやdをつけた項目については、できればその理由等もお書き下さい）。

（裏面もご利用下さい） ご協力ありがとうございました。

表2 2003年度公開授業のアンケート結果1

1. 「看護学概論Ⅲ」を学生が最も良い授業と評価した理由は何だと考えますか。

◇テーマが適切だったから

- ・ あげられたテーマが、いずれも現在の看護を取り巻く「トピック」であった
- ・ 4年間をかけて学んだ看護の総まとめ的な意味合いが強いこと
- ・ 取り上げられた課題が全て、これから看護師という職業を担っていく学生にとって、非常に重要な事柄ばかりであったこと
- ・ 4年生で実習すべてが終わったこの時期に、学生としてもこのようなテーマで話し合うことに、大変関心が高いということはあると思います。
- ・ 卒業し、臨床に出ることを目前にした学生たちの、興味・関心の深いテーマで行われていることまたその興味のあることを、自分たちで調べたり考えたりしていること
- ・ これから学生たちが従事する業務について、お互いの考えを交換しあう機会を与えられたから
- ・ 学生の実習体験を通して、学生のニーズにあった授業内容であり、方法だったのではないかと思います
- ・ 学生が自身の臨床実習の経験といままで学んできたことを自分の言葉で考えることができる授業だから
- ・ 扱うテーマがリアリティあるもので、近い将来自分に関係してくるものだからだと思います。
- ・ いろいろな意味でこの四年間学んできた集大成の内容ということで主体的に参加する動機付けができていていること
- ・ 学生が体験の中で話し合いができる話題であること
- ・ 実習で体験した中でも困惑したり、考えたりした話題であること。

◇時期が適切だったから

- ・ 全ての実習が終了し、実習を通して学生個々が成長し学生のレディネスが高い時期の授業だったから
- ・ 今後社会に出て自分たちが直面するという意識が学生自身にも高くあるモチベーションも高い時期の授業だったので、期間が短くても調べたことをまとめ、発表した上で討論までできるのだと思います。
- ・ 実習を終えたこの時期であるからこそ、この「看護学概論」が学生にとって意味のある授業となるのだと思う。そして、そのことを学生も実感しているからこそ、「最も良い授業」と評価しているのではないかと思います。
- ・ これから自分たちが社会に出て働く「看護」という職業について考えるという大変身近な話題であり現実感が非常に強いということ
- ・ 実習前であれば、このような内容にはならなかったのではないかと思います。
- ・ この授業の受講が4年生の終了時であり、臨床実習という看護学生にとっては、高いハードルを無事終了して間もない時期であるため、看護に対してのモチベーションが最も高い時期であるためと考えられる。

◇学生の主体性が発揮されていたから

- ・ ディスカッションの内容を聞いていると、「主体的に」課題に取り組んだからこそ、出される疑問であったり、実習場面で考えさせられた場面を、再構成して「自分のこととして」考えた質疑応答であったように思います。
- ・ 学生が主体となって、グループワークをすることで、グループ内での深まりが得られ、授業に対するモチベーションも上がるのだと思った。
- ・ 学生たち自らが発表するという学生主体の形式をとっている授業であること
- ・ 学生たち自らが発表するという学生主体の形式をとっている授業であること
- ・ 授業の進行にあたって、学生を完全なお客様に仕立て上げるのではなく、多少の時間を要しても、学生が自主的に授業に参加することが大事であることを学びました。
- ・ テーマ、レジュメ等全て学生主体で進められ、学生がやる気（意欲）をもって取り組んだことが素晴らしい。

◇グループワークだったから

- ・ 学生同士で意見交換ができること。授業形式に幅（これが正解これは間違いというような答えがなく、自分の意見を述べることができる）があること
- ・ グループワークで存分にディスカッションでき、自分たちが考えなくては、授業が成立しない授業形態も学生の積極性を生み出し、授業に対する満足度が高くなり、授業評価も高くなったのではと考える
- ・ グループワーク内容の発表という形式が、学生が主体的に参加しなければ成り立たない授業であること
- ・ 実習という自己の体験を素材にグループワークできること
- ・ グループワークという学習方法も、実習の中で繰り返し体験した学習方法であるため学習方法そのものが学生にとって困難な学習方法でなかったこと（1・2年生だとグループワークそのものをうまく運営できなかったり、意見の言えない学生も多い）

◇担当教員の魅力

- ・ 何よりも学生にとってカリスマ的存在である野村先生の授業であり、授業でのお話のされ方もとても落ち着いておられて、じっくりと落ち着いた気持ちで聞くことができたこと
- ・ 野村先生が提示されているテーマが、考えを紐解きやすいようなテーマの設定になっていることも挙げられると思われる
- ・ 自分だけでなく他の学生の発表や意見を聞けることで、自分の知識、考えが深まること野村先生の今まで築き上げた看護観や知識について聞けて、卒業を前にした今だからそれが学生により理解できるようになっていること。
- ・ ここまでにもってきた先生の努力と熱意に心から拍手を送りたい

◇その他の理由

- ・ 事前学習（講義以外の時間を使ってのグループワーク）をしなければ知りできない話題であることから、評価表の自己の取り組み部分の評価が上がる要因が高いこと

◇今後の課題

- ・ ディスカッションの時間がもう少しあったらと思った
- ・ あれだけの人数で、ディスカッションするというのに難しさがあるようにも思いました
- ・ 今現在の人数のクラスでは非常に難しいのも現状である
- ・ 学生自身も責任をもって授業に望めるような授業を行なえていけたらよいと思います

表3 2003年度公開授業のアンケート結果2

2. こうした授業公開についてどう考えますか。

◇役に立った（今後も継続）

- ・ いろいろな先生方の授業を拝見して、授業の進め方や、教育・評価に対する技術や知識を深めていきたい
- ・ 貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました
- ・ グループワークの発表だったので、内容は興味深かった
- ・ とても勉強になりました。学生は十分に自分たちの考えをまとめたり、調べたりすることができるのだと思った
- ・ 授業の公開は、公開された授業を見て何を学ぶか？という自分自身の課題の持ち方にもよると思うが、私は賛成です
- ・ 他の先生がどのような授業をされているのかを聴講できたことは大変学びになった
- ・ 現在の4年生の考えや、成長ぶりを知るとい意味では、とても有意義でした

- ・特に実習に多く関わっているので、授業や実習を通してどのように学び、考え、悩んでいるのかが理解でき、また学生の成長を感じることができるので、今後も大いに参加できればと考える
- ・野村先生と学生がこんなことをしているという実際が見られたことは、とてもよかった
- ・学生や教員の様子を共有し合えるという点ではよかった
- ・大変参考になりました
- ・自分の授業を見直す上で役に立つ方法だと思います
- ・これからも続けてほしいと思います
- ・悪くは無いと思います

◇改善の余地がある

- ・このような講義が可能な講義の内容もあると思いますが、そうできない講義の内容もあると考えます
- ・全ての授業で公開することが教員、学生に必ずしもいいとは言えないこともある
- ・授業評価は一側面からだけでなく評価される必要もあると思います
- ・4コマは如何にも多すぎると思う
- ・自分の講義となると何となく抵抗があります
- ・グループワークそのものに教員がどのように関わったのかという点は公開されていませんでした
- ・またやはり120名でグループワークを行う限界も感じました
- ・発表内容の質も問われていません
- ・公開授業を行うことに関して、学生がどのように感じたのを知りたいです

◇役立たなかった

- ・自分の授業方法の改善として参考にできる部分はあまり得られませんでした
- ・授業法を学ぶという意味では、この時期のこの学生でなければできないことで、特殊な状況だと思うので、ほかの学年などにそのまま応用することはできないと思いました

◇教員の負担が大きい

- ・公開授業をされた先生の負担はとても大きいのではないかと思います

表4 表1に示した11項目についての集計結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
件数(n)	16	16	16	14	14	16	16	14	12	12	11	
aの数	16	15	7	9	12	8	13	12	8	0	3	
bの数	0	1	9	5	2	5	3	2	4	3	4	
cの数	0	0	0	0	0	3	0	0	0	6	3	
dの数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	
aの%	100.00	93.75	43.75	64.29	85.71	50.00	81.25	85.71	66.67	0.00	27.27	
bの%	0.00	6.25	56.25	35.71	14.29	31.25	18.75	14.29	33.33	25.00	36.36	
cの%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	18.75	0.00	0.00	0.00	50.00	27.27	
dの%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	25.00	9.09	全体平均
aの%平均	教員の取り組み について		79.17	授業内容と進め方について				73.39	この授業に対するあなた自身の取り組み について		31.31	63.49
bの%平均			20.83					22.86			31.57	24.68
cの%平均			0.00					3.75			25.76	8.73
dの%平均			0.00					0.00			11.36	3.10

表5 2004度公開授業のアンケート結果

<p>コメントの項目別分類</p> <p>◇公開授業のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の内容そのものは、自分の講義にとっても役に立った。これからもこのような公開授業をすることは、教員がお互い、どの様な内容の授業をしているかという上で、とても有意義だと思いました。 ・ 学生が基礎科目で何をやっているのか理解することは大切だと思う。 ・ 貴重な機会をいただきありがとうございました。 ・ 大変興味深い授業でした、ありがとうございました。 ・ 見ていて楽しかったです。ありがとうございました。 ・ 参加させていただいて楽しかったです。ありがとうございました。 ・ 研究授業の時は授業案を配布してもらいたい。先生の意図や狙いが伝わりにくいと思う。 <p>◇実習の重要性について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に行ってみることが、記憶につながるので実習実験はとても大事と思います。 ・ 体験するということが意味があり、体験から考えるという能力も養われると考えるため、体験学習は大いにすべきだ。 ・ 実験授業は学生の主体性を引き出すとても良い授業だと思います。 ・ 看護学部なのだから、全員にカエルの実習を課しても良かったと思います。 ・ 学生がとても真剣に取り組んで演習している姿が印象的でした。 ・ 学生は解剖を、実体験を通して認識していた。 <p>◇学習結果の発展について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二手にグループを分けて、カエルと感覚の実験をやりましたが、お互いに理解したことを情報交換する場はあるのでしょうか。それから筋収縮については、感覚の学生にも見せてあげても良かったかなと思いました。 ・ 実験授業の前の導入、後のまとめが難しいなあ、とも思いました。後のまとめは、もう少し複数の教員で、この実験と人間の生理と、ボディーメカニクスなどが関連付けて考えられるようだグループ学習支援が出来れば良いなと思ったりもしました。 ・ 感覚実験のメンバーが体験していることは、カエルの方の学生は全く体験または学習しないのでしょうか。(逆もです。) <p>◇授業の道具についての改善案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ビデオカメラを使って、物品の説明をした方が効果的ではないでしょうか（ピンセットの見分けがつかない）。 ・ 随時、ビデオカメラで観られるようにすると、もっと分かりやすいかも知れないと思いました。 ・ 小型スライドプロジェクターなどを使って全員が見られる方がいいかなと思いました。 ・ ビデオが古い(?) ののでしょうか見にくいような気がしました。なるべく大きくズームアップするような工夫が必要ではないかと思いました。 ・ 当日のレジュメの、3ページと4ページは同時に見えるように製本した方がいいと思います。 ・ パソコン画面の波形は太くならないでしょうか。 ・ ビデオが古く見づらい。とり直すか教師のリアルタイムデモンストレーションをカメラで見せた方が効果的だと思う。例えば、心臓や座骨神経などはもっとカメラがよらないと（アップにしないと）見えない。 <p>◇グループ編成・担当教員の不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループの人数が割と多い内容では、後ろの席の学生はパソコン画面が見えず、いまひとつ参加度がうすいよ
--

うに感じました。

- ・このような授業の場合はアシスタントが欲しいと思います。教員の確保が難しいと思うので、上級生が協力してくれるとか、何かできないものかと思います（人に教えることも勉強になるので）。ただ時間を合わせるのが難しいでしょうか。
- ・実習中もちろんだが、前もって準備には大変な人手を要することであろう。
- ・学生は1グループ4～5人で実習したが、傍観者になるものではなく、全員がそろって熱心に取り組んでいた。
- ・カエルの解剖時、教員を求める声が多く聞かれた（そこらじゅうで「先生」「先生」という声が多い印象がある）。指導する教員の対応にも限りがあると思うので、教員数を増やすべきであると思う。
- ・やはり1グループの学生数が多いので、良く見えないとか、聞こえない位置にいる学生で、授業の流れについていってなくて、後ろの机で居眠りをしている学生などがいて、参加できていない学生もいるようだった。あの学生たちはどうなのかな？とちょっと気になった。
- ・これだけの数の学生に実験や実技やらで、学生を動かす手間（準備・後始末）へのエネルギーは大変だと思う。

◇授業の運営について

- ・最初のオリエンテーションがわかりやすかった。看護学生としての倫理もまじえての説明だったので納得できた。
- ・生命について考える場となっているのでは？
- ・実習にあたっての身支度、衛生的配慮、心理的準備等に関して十分な説明と指導が行われ、カエルの神経筋標本を作成して、神経機能の基本的な減少を調べる方法（原理）を学び、人体（人間）にも共通する、生理的現象に対する、理解を動機づけるのに有益な授業である。
- ・看護学の上では、意味をそれほど感じないが、医療の進歩には動物実験による犠牲が欠かせないので、そのことについて考えてもらえると良いと思う。
- ・学生が先生を自由に取り囲んで、のぞき込みながらデモを見ている雰囲気はとてもよかった。

Ⅳ. まとめ

2003年度、2004年度の公開授業では、公開授業はその授業に参加した教員にとって、教授法の改善に役に立つ何かを得られるという肯定的な意見が多かった。一方で、多くはないものの、自身の授業に役立つ点は無かったとする意見もあった。公開授業を担当した教員は、授業を公開して同僚教員から改善点を含めてコメント（評価）がもらえたのは、今後の授業の構築に役立つとの考えであった。

また、「学生による授業評価」で学生が授業を高く評価する理由として、教員が、①授業のテーマが適切なこと、②授業の時期が適切なこと、③学生の主体性が発揮されていたこと、④グループワークだったこと、を指摘したことが分かった。これは、PBLやチュートリアル教育が必要だと考えられるに至った理由と整合が見られる。

教授法の改善のために、「教員による授業相互評価」を行う場合、特定の少数の教員だけが評価をするより、「公開授業」のような不特定・多数の同僚教員によって評価を行う方が、教授法の改善には効果やメリットが大きい可能性があることが分かった。

Ⅵ. 謝辞

公開授業を計画し実施する中で、本学の教員には、アンケートやオープンディスカッションなどで、様々な協力をいただきました。また、看護学部の学生、特に2003年度の4年次生と2004年度の1年次生には協力を得ました。あわせて感謝します。

引用・参考文献

- 1) 池田輝政、戸田山和久、近田政博、中井俊樹（2001）：成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集—, pp151-153, 玉川大学出版部, 東京.
- 2) 川野雅資（2004）：教員の相互評価の試み, 日本看護系大学協議会FD委員会研修会「看護系大学における教員評価」（2004年1月9日：東京医科歯科大学）.
- 3) 私信.
- 4) 早田幸政（訳）（2003）大学・カレッジ教育評価事例ハンドブック—アメリカ北中部地区基準協会『自己評価と改善・改革に関する論集』より—, pp. 1-7, 財団法人大学基準協会, 東京.
- 5) 香取草之助（監訳）（1995）授業をどうする！—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集—, 東海大学出版会, 東京.